『表現学』第五号（平成二一年三月五日）抜刷
大正大学表現学部表現文化学科

『トニー滝谷』の本文改訂（六）

―ショート・ロング両ヴァージョンの登場女性に関する描写（1）―

森　晴彦

『トニー滝谷』の本文改訂（六）

―ショート・ロング両ヴァージョンの登場女性に関する描写（1）―

森　晴彦

はじめに

村上春樹『トニー滝谷』の本文異同についての考察を続け（1）、前稿では、ショート・ヴァージョン（「文藝春秋」b-1、『文藝春秋短篇小説館』b-2）と、ロング・ヴァージョンc-1『村上春樹全作品1979～1989⑧』（平二、講談社。以下『全作品⑧』と略称）、そこから五二箇所七九個の削除改訂を施すロング・ヴァージョンc-2・3（単行本『レキシントンの幽霊』平成八年、文庫本『レキシントンの幽霊』平成一一年）における父滝谷省三郎と上海の描写について考察したが、本稿では、トニー滝谷の母・彼女&妻・応募女性――つまり作品内に登場する女性に関する描写について些かの指摘しておこうとするものである。

旧稿でも示したが、本稿でも『トニー滝谷』の本文の分類について以下に簡便に示しておく。

（a）ロング・ヴァージョン
・未発表
（b）ショート・ヴァージョン
・「文藝春秋」六八巻七号、平成二年六月（b-1）
・『文藝春秋短篇小説館』平成三年九月（b-2）
（c）ロング・ヴァージョン
・『村上春樹全作品1979～1989⑧』平成三年七月（c-1）
・単行本『レキシントンの幽霊』平成八年一一月（c-2）
・文庫本『レキシントンの幽霊』平成一一年一〇月（c-3）

本稿では、ショート・ヴァージョンと、ロング・ヴァージョンc-1（『全作品⑧』）、ロング・ヴァージョンc-2・3（単行本・文庫本『レキシントンの幽霊』）の本文批評を比較し、登場する女性に関する描写について増補訂や削除を中心とした本文異同を指摘・考察し、創作過程論上、特記せねばならないことなどを指摘していこうとするものである。

本文への記号は、概ね以下の方針で付している。

（b-1・2）ショート・ヴァージョンにあるもロング・ヴァージョンc-1（『全作品⑧』）で削除された箇所を□で囲み示した。両ヴァージョン間で異同がある箇所には傍線を付した。

『全作品⑧』（c-1）にあるが『レキシントンの幽霊』文庫本（c-3で削除された箇所は□で囲んだ。ヴァージョン間で異同がある箇所には傍線を付した。文庫本で新たに挿入された文言に二重傍線を付した。また、改訂の場合、囲みではなく両方に二重傍線を付した。

母関係の改訂

トニー滝谷の母の突然の舞台からの降板は、彼女&妻の降板と重ねられているかのような描かれ方であり、これは読み進めていくにしたがって気づいていく描写である。

（b-1・2）ショート・ヴァージョン

彼が結婚したのは昭和二十二年のことだった。相手は母方の遠縁にあたる娘だった。ある日街でばったりと巡り合って、お茶を飲みながら親戚の消息を聞いたり昔話を

したりした。それからふたりは行き来するようになり、やがて自然に一緒に住むなってしまった。綺麗で物静かな娘だったが、体があまり丈夫ではなかった。

（c-1・2・3）ロング・ヴァージョン（全作品⑧）（文庫本）

彼が結婚したのは昭和二十二年のことだった。相手は母方の遠縁にあたる娘だった。ある日街を歩いているときにばったりと巡り合って、お茶を飲みながら親戚の消息を聞いたり昔話をしたりした。それからふたりは行き来するようになり、やがてなんとなく――たぶん彼女が妊娠したせいではないかと推察されるのだが――一緒に住むなってしまったのだ。

少なくともそれがトニー滝谷が父親の口から聞いた話だった。滝谷省三郎がどれほど妻のことを愛していたのか、トニー滝谷にはわからない。綺麗で物静かな娘だったが、体があまり丈夫ではなかった、と父親は言った。

ここは、ショート・ヴァージョンを増補したものを改訂なくロング・ヴァージョンに継承する箇所である。「やがて自然に」を「やがてなんとなく」に改訂し、ロング・ヴァージョンでは一緒に住むようになる経緯の中にトニー滝谷懐妊を盛り込んでいる。また、体があまり丈夫ではない等を父親の省三郎から聞いた話というスタイルに改変している。ロング・ヴァージョン間の異同は全くないのも特記されよう。

（b-1・2）ショート・ヴァージョン

結婚した翌年には男の子が生まれた。子供が生まれた三日後に母親は死んだ。あっという間に彼女は死んで、あっという間に焼かれてしまった。非常に静かな死に方だった。何の葛藤もなく、苦しみらしい苦しみもなく、すうっと消えいるように死んでしまったのだ。まるで誰かが裏側でこっそりとスイッチを切ったみたいに。

（c-1・2・3）ロング・ヴァージョン（全作品⑧）（文庫本）

結婚した翌年には男の子が生まれた。子供が生まれた三日後に母親は死んだ。あっという間に彼女は死んで、あっという間に焼かれてしまった。非常に静かな死に方だった。何の葛藤もなく、苦しみらしい苦しみもなく、すうっと消えいるように死んでしまったのだ。誰かが裏にまわってそっとスイッチを切ったみたいに。

まるで誰かが裏側でこっそりとスイッチを切ったみたいに、をロング・ヴァージョンでは、「まるで」を消去して喩えを後退させ、「裏側でこっそりと」を「裏にまわってそっと」と改訂している。

ここもロング・ヴァージョン間の異同は全くないことが特記できる。

総じて母親の描写は、ロング・ヴァージョンc-1（全作品⑧）で増補したものをそのままc-2・3でも踏襲している。このことから、母親の描写は増補改訂でもブレることなく、右に示した要素で描かれているわけである。

以下は、妻亡き後の省三郎の描写ではあるが、ここに関連するので示しておく。

（b-1・2）ショート・ヴァージョン

滝谷省三郎は妻の死後、二度と結婚はしなかった。彼も息子と同じようにひとりでいることに慣れてしまったようだった。

（c-1）ロング・ヴァージョン（全作品⑧）

滝谷省三郎は妻の死後、どういうわけか二度と結婚はしなかった。もちろん相変わらず数多くのガール・フレンドを作りつづけはしたけれど、そのうちの誰かを家に連れてくるようなことは一度もなかった。彼も息子と同じようにひとりでやっていくことに慣れてしまったようだった。

（c-2・3）ロング・ヴァージョン（単行本）（文庫本）

滝谷省三郎は妻の死後、どういうわけか二度と結婚はしなかった。もちろんあいかわらず数多くのガール・フレンドを作りつづけはしたけれど、そのうちの誰かを家に連れてくるようなことは一度もなかった彼も息子と同じようにひとりでやっていくことに慣れてしまったようだった。

滝谷省三郎が再婚しなかったことを示す箇所だが、上海時代の旺盛な女性関係の省三郎からすると再婚せず女性が周囲にいないということはたいそうな豹変ぶりとなり、不自然である。ここは自然な流れとしては、ロング・ヴァージョンで増補するような関係が相応しいわけである。その証拠が「相変わらず」という文言である。上海時代の描写を承けての増補された言葉である。

「相変わらず」を「あいかわらず」にするだけなので、ここもロング・ヴァージョン間の異同は、ほとんどない。

トニー滝谷が美大を出て、ひっぱりだこのイラストレーターになった後にロング・

ヴァージョンに追加された箇所もまた前述したことと同じ意味合いで増補された箇所である。

（b-1・2）ショート・ヴァージョン

なし

（c-1・2・3）ロング・ヴァージョン（全作品⑧、単行本・文庫本）

そのあいだずっと滝谷省三郎はトロンボーンを悠々と吹きつづけていた。モダンジャズの時代になり、フリージャズの時代になり、エレクトリック・ジャズの時代になっても滝谷省三郎はあいかわらず昔ながらのジャズを演奏しつづけていた。一流の演奏家というわけでもなかったけれど、名前はけっこう売れていたし、いつも何がしかの仕事はあった。美味いものも食べられたし、女に不自由するということもなかった。不満があるかないかという観点から人生を見れば、それはまず上出来な人生だった。

とある。ここもロング・ヴァージョン間の異同は、全くない。

彼女&妻以前の女性の改訂

彼女&妻を見る前に、その前段階の描写を見ておきたい。

（b-1・2）ショート・ヴァージョン

トニー滝谷はそれまでに何人かの女とつきあった。若い頃、短い期間ではあったけれど、一緒に暮らしたこともあった。しかし結婚を考えたことは一度もなかった。結婚する必要がなかったのだ。大抵の家事は自分でやれたし、あとのことは通いの家政婦が片づけてくれた。一人で眠る方が気楽だったし、子供を欲しいと思ったこともなかった。俺はおそらく一生結婚しないだろうと彼は思った。

（c-1・2・3）ロング・ヴァージョン（全作品⑧、単行本・文庫本）

トニー滝谷はそれまでに何人かの女とつきあった。若い頃、短い期間ではあったけれど、一緒に暮らしたこともあった。しかし結婚を考えたことは一度もなかった。結婚する必要性というものをとくに感じなかったのだ。料理も掃除も洗濯も全部自分でやったし、仕事が忙しいときには契約制の家政婦を呼べばよかった。子供を欲しいと思ったことは一度もなかった。彼には何かを相談したり、気持ちを打ち明けたりすることのできる親しい友人もいなかった。父親ほど愛想はよくないにせよ、日常的にはごく普通にまわりの人たちとつきあうことはできた。彼は威張らなかったし、自慢もしなかった。自己弁護もしなかったし、他人の悪口も言わなかった。自分のことを喋るよりは、他人の話を聞くことの方を好んだ。だからまわりにいる大抵の人々は彼のことを好いてくれた。しかし彼には誰かと現実的なレベルを越えた人間関係を結ぶということがどうしてもできなかった。父親とは何かの用事で二年か三年に一度くらい顔をあわせるだけだった。顔をあわせても、用事が済んでしまうと、二人のあいだにはそれ以上とくに話すべきことはなかった。トニー滝谷の人生はかくの如く静かに緩やかに過ぎていった。俺はおそらく一生結婚しないだろうと彼は思った。

ロング・ヴァージョン（c-1）では、トニー滝谷が自立した人間で、そのため他者の介在がいかに必要なかったかが増補されている。「結婚する必要がなかったのだ」は「結婚する必要性というものをとくに感じなかったのだ」に改訂され、「大抵の家事は自分でやれたし」は「料理も掃除も洗濯も全部自分でやったし」と大抵の家事が具体化されているし、「あとのことは通いの家政婦が片づけてくれた」は、〈それ以外は家政婦が片づけてくれた〉と連接を読み取られるのを嫌い、「仕事が忙しいときには契約制の家政婦を呼べばよかった」とわざわざ、仕事が忙しいときは契約制の家政婦を呼べば済んだ的な恒常的な日常性を薄める表現に改訂しているのである。

「一人で眠る方が気楽だったし」は大幅に増補し三三八字を費やして、いかに一人で過ごしている方が楽である人物かを強調しているのは右の傍線部の通りである。

ここは、何人かの女性との交際と、日常生活でいかに一人で大丈夫か、の両者が強調されており、トニー滝谷の孤独を強調することにもなっている。そしてこれらは次に来る突然恋に落ちることがトニー滝谷にとっていかに奇異なことであるかを強調する効果を果たす描写になっている。

彼女&妻の改訂

彼女&妻に関しては興味深い改訂が散見する。

（b-1・2）ショート・ヴァージョン

しかしある時突然、何の前触れもなく、トニー滝谷は恋に落ちた。相手は彼の事務所にイラストレーションの原稿を取りにきた出版社の女の子だった。彼女の歳は二十二だった。驚くような美人ではなかったが、彼女の顔にはなにかしら彼の心を打つものがあった。

（c-1）ロング・ヴァージョン（全作品⑧）

しかしある時突然、何の前触れもなく、トニー滝谷は恋に落ちた。それは本当に理不尽なくらい唐突な出来事であった。相手は彼の事務所にイラストレーションの原稿を取りにきた出版社のアルバイトの女の子だった。彼女の歳は二十二だった。彼女は事務所にいるあいだずっと静かな微笑みを口に浮かべていた。なかなか感じの良い顔立ちの娘だったが、客観的に見ればとくべつに美人というほどではなかった。彼女の中の何がそれほど強く彼の心を打ったのか、彼にもよくわからなかった。

（c-2・3）ロング・ヴァージョン（単行本）（文庫本）

しかしある時突然、トニー滝谷は恋に落ちた。相手は彼の事務所にイラストレーションの原稿を取りにきた出版社のアルバイトの女の子だった。歳は二十二だった。彼女は事務所にいるあいだずっと静かな微笑みを口に浮かべていた。なかなか感じの良い顔立ちの娘だったが、とりたてて美人というほどではなかった。彼女の中の何がそれほど強く彼の心を打ったのか、自分でもよくわからなかった。

「何の前触れもなく」は母が亡くなった時の「何の葛藤もなく」と連結する言い回しであるし、ロング・ヴァージョンで追加された、彼女が「ずっと静かな微笑みを口に浮かべていた」という増補は「非常に静かな死に方」をした母と連結する言辞であることから、一生結婚などしないだろうと予測していたトニー滝谷を一瞬で虜にした彼女の造形に母が意図的に被らされている増補改訂の箇所でもある。

二二歳の出版社勤務は早生まれの三か月の誕生でかつ四月入社で年を越した誕生日までの期間ということにもなり（早生まれ一～三月生まれの入社一年未満の女子）、不自然さが際立つため「アルバイトの」がロング・ヴァージョンにした際に増補されている(2)。

ショート・ヴァージョンの「驚くような美人ではなかったが」は、ロング・ヴァージョン『全作品⑧』（c-1）では「客観的に見ればとくべつに美人というほどではなかった」に増補され、『レキシントンの幽霊』単行本（c-2）文庫本（c-3）では「客観的に見れば」を削除し「とりたてて美人というほどではなかった」に改訂されている。なお、ロング・ヴァージョンでは、彼女が「彼の心を打った」のはどのヴァージョンも同じだが、何が心を打ったのかは、「彼にも（全作品⑧）」「自分でも（レキシントンの幽霊）」わからなかった、を加えている。

（b-1・2）ショート・ヴァージョン

それから服の着こなしがとても上手かった。彼女はとても楽しそうに、とても誇らしげに服を身にまとっていた。服の方も彼女に着られることで生命感を帯びたようにさえ見えた。

（c-1）ロング・ヴァージョン（全作品⑧）

それから彼は娘の着こなしに注意を引かれた。そして彼はとくに洋服には興味を持たなかったし、女の着ている服のことをいちいち気にとめるような人間でもなかったのだが、その娘が素晴しく気持ちよさそうに服を着こなしている様子に、彼はなんだかすっかり感心してしまった。感動したといってもいいくらいだった。彼女はまるで別の世界へと飛び立つ鳥が特別な風を身にまとうように、とても自然にとても優雅に服をまとっていた。彼はこれまでそんなに楽しげに服を着ている女性を見たことがなかった。服の方も彼女の身にまとわれることによって、新たな生命を獲得したかのように見えた。

（c-2・3）ロング・ヴァージョン（単行本）（文庫本）

それから彼は娘の着こなしに注意を引かれた。彼はとくに洋服には興味を持たなかったし、女の着ている服のことをいちいち気にとめるような人間でもなかったのだが、その娘が気持ちよさそうに服を着こなしている様子に、なんだかすっかり感心してしまった。感動したといってもいいくらいだ。彼女はまるで遠い世界へと飛び立つ鳥が特別な風を身にまとうように、とても自然にとても優雅に服をまとっていた。服の方も彼女の身にまとわれることによって、新たな生命を獲得したかのように見えた。

ショート・ヴァージョンをロング・ヴァージョン『全作品⑧』（c-1）では丁寧に増補するが、『レキシントンの幽霊』単行本（c-2）文庫本（c-3）では、囲みの箇所を削除し過剰な表現を抑制したかの観がある。ショート・ヴァージョンが示しているように、この「服」が結局彼女の命を奪うわけであるから、ここの表現の変化は実に興味深い。ことにロング・ヴァージョン『全作品⑧』（c-1）が「別の世界に飛び立つ鳥が」を『レキシントンの幽霊』単行本（c-2）文庫本（c-3）が「遠い世界へ」に改訂したことは示唆的で、彼女の死への旅立ちを象徴的に映し出している箇所でもある[3]。

いずれにしても、ショート・ヴァージョンをロング・ヴァージョン『全作品⑧』（c-1）で増補しつつ、『レキシントンの幽霊』（c-2・3）で増補した箇所（囲み部分）の彼から視点を中心に削除していることは一目瞭然であろう。母の描写では、ロング・ヴァージョン『全作品⑧』（c-1）で増補した箇所を『レキシントンの幽霊』（c-2・3）で削除する改訂をしていることはなく、表現は継続されていたが、彼女&妻の場合、ショート・ヴァージョンに（c-1）でかなりの増補をしつつ（c-2・3）で再び削除している流れが見て取れるのではないだろうか。

（b-1・2）ショート・ヴァージョン

なし

（c-1）ロング・ヴァージョン（全作品⑧）

彼は一目見たときから胸が詰まってうまく息ができないくらいだった。彼女の中の何がそれほど強く彼の心を打ったのか、彼にもよくわからなかった。もしわかったとしても、それは言葉で説明できる種類のものではなかった。

それから彼は娘の着こなしに注意を引かれた。そして彼はとくに洋服には興味を持たなかったし、女の着ている服のことをいちいち気にとめるような人間でもなかったのだが、その娘が素晴しく気持ちよさそうに服を着こなしている様子に、彼はなんだかすっかり感心してしまった。感動したといってもいいくらいだった。ただ単に上手い着こなしをする女ならけっこういた。これ見よがしに着飾っている女はそれ以上に沢山いた。でも彼女はそんな女たちとはぜんぜん違っていた。彼女はまるで別の世界へと飛び立つ鳥が特別な風を身にまとうように、とても自然にとても優雅に服をまとっていた。彼はこれまでそんなに楽しげに服を着ている女性を見たことがなかった。服の方も彼女の身にまとわれることによって、新たな生命を獲得したかのように見えた。

（c-2・3）ロング・ヴァージョン（単行本）（文庫本）

彼は一目見たときから胸が詰まってうまく息ができないくらいだった。彼女の中の何がそれほど強く彼の心を打ったのか、自分でもよくわからなかった。もしわかったとしても、それは言葉で説明できる種類のものではなかった。

それから彼は娘の着こなしに注意を引かれた。彼はとくに洋服には興味を持たなかったし、女の着ている服のことをいちいち気にとめるような人間でもなかったのだが、その娘が気持ちよさそうに服を着こなしている様子に、なんだかすっかり感心してしまった。感動したといってもいいくらいだ。ただ単に上手い着こなしをする女ならけっこういた。これ見よがしに着飾っている女はそれ以上に沢山いた。でも彼女はそんな女たちとはぜんぜん違っていた。彼女はまるで別の世界へと飛び立つ鳥が特別な風を身にまとうように、とても自然にとても優雅に服をまとっていた。服の方も彼女の身にまとわれることによって、新たな生命を獲得したかのように見えた。

ショート・ヴァージョンの前掲「それから服の着こなしがとても上手かった。彼女はとても楽しそうに、とても誇らしげに服を身にまとっていた。服の方も彼女に着られることで生命感を帯びたようにさえ見えた」を、このようにロング・ヴァージョン『全作品⑧』（c-1）で増補しつつ、『レキシントンの幽霊』単行本（c-2）文庫本（c-3）では囲み箇所を削除し微細な改訂をしているのが一目瞭然である。また、ここは何といっても彼女の造形に関わる「服」の初出描写である。ロング・ヴァージョンの増補はその意味でも重要である。

これらは、ショート・ヴァージョンの「……生命感を帯びたようにさえ見えた」以降に長文の増補して書き加えたものである。ショート・ヴァージョンは驚愕の出会いの後、本来、次の文に続いていく。

（b-1・2）ショート・ヴァージョン

彼女がその部屋にいたのはほんの五分くらいのものだった。彼女はそこに入ってきて、原稿を受け取り、彼女が「ありがとうございます」と言って帰っていった。彼

女が出ていったあと、しばらく彼は口もきけなかった。

（c-1）ロング・ヴァージョン（全作品⑧）

彼女が「ありがとうございます」と言って原稿を受け取って帰ったあと、しばらく彼は口もきけなかった。

（c-2・3）ロング・ヴァージョン（単行本）（文庫本）

彼女が「ありがとうございます」と言って原稿を受け取って帰ったあと、しばらく口もきけなかった。

彼女の滞在時間が「五分くらい」と記しているのはショート・ヴァージョンだけである。今、見てきたロング・ヴァージョンの増補がないため、ショート・ヴァージョンはコンパクトな緊密感がある。滞在時間もその流れからのものであろう。

ショート・ヴァージョンの「五分くらい」が際立つのは、その後のトニー滝谷の「しばらく」「口がきけない」という時間の長さが引き立つことになるからだ。

（b-1・2）ショート・ヴァージョン

年齢が十五も離れていたにもかかわらず、二人は不思議に話があった。彼女も最初は緊張していたのだが、だんだんリラックスして、よく笑い、よく話すようになった。

（c-1・2・3）ロング・ヴァージョン（全作品⑧、単行本・文庫本）

年齢が十五も離れていたにもかかわらず、二人は不思議に話があった。何を話しても、うまく話が嚙み合っていった。そういう経験は彼にとっても、彼女にとっても初めてのことだった。彼女も最初は緊張していたのだが、だんだんリラックスして、よく笑い、よく話すようになった。

二人は話が合う、というショート・ヴァージョンを延長して、特別なシンパシティを二人が持つことを強調する文言を増補している。ショート・ヴァージョンでは読み取れなかった二人の接近具合が、「何を話しても」を加えることで二人の波長が合うことを強調しているし、話がうまく嚙み合う経験は二人にとって初めてであったという文言を入れることでそれはさらに明確化している。

（b-1・2）ショート・ヴァージョン

それから二人は何度かデートをした。ふたりは会うと、どこか静かなところに座ってずっと話をした。お互いの身の上を話し、仕事について話し、いろんなものごとに対する感じ方や考え方について話した。ふたりはまるで空白を埋めるみたいに熱心に話しをした。いつまでも話しつづけられそうな気がした。彼が結婚を申し込んだのは五度目に会ったときだった。しかし彼女はすぐには返事をしなかった。実は彼女には高校時代からつきあっている（でも最近はどうもしっくりといかない）恋人がいた。そしてふたりの年齢は世間の常識からすればいささか離れすぎていた。彼女はまだ若く、人生の経験に乏しかった。少し考えさせてほしいと彼女は言った。

（c-1）ロング・ヴァージョン（全作品⑧）

それから二人は何度かデートをした。とくにどこかに行くというのでもなく、ふたりはどこか静かなところに座ってずっと話をした。お互いの身の上を話し、仕事について話し、いろんな物事に対する感じ方や考え方について話した。彼らはいつまでも飽きもせずに話しつづけることができた。ふたりはまるで空白を埋めるみたいに熱心に話しをした。いつまでも話しつづけられそうな気がした。そして五度目に会ったときに彼は結婚を申し込んだ。しかし彼女には高校時代からつきあっている恋人がいた。年月の経過とともに、二人の関係はもうひとつしっくりといかなくなって、今では会う度につまらないことで口喧嘩をするようになっていた。正直に言って、彼と会うのはトニー滝谷と会うときのように手放しで楽しくはなかった。でもだからといって、その恋人との関係をすぐに切ってしまうことはできなかった。彼女には彼女なりの思いがあった。そしてトニー滝谷と娘のあいだには十五も歳の差があった。彼女はまだ若く、人生の経験に乏しかった。その十五という年齢の差がこの先どういう意味を持つのか、測りかねた。少し考えさせてほしいと彼女は言った。

（c-2・3）ロング・ヴァージョン（単行本・文庫本）

それから二人は何度かデートをした。とくにどこかに行くというのでもなく、ふたりはどこか静かなところに座ってずっと話をした。お互いの身の上を話し、仕事について話し、いろんな物事に対する感じ方や考え方について話した。彼らはいつま

でも飽きもせずに話しつづけることができた。ふたりはまるで空白を埋めるみたいに熱心に話しをした。いつまでも話しつづけられそうな気がした。そして五度目に会ったときに彼は結婚を申し込んだ。しかし彼女には高校時代からつきあっている恋人がいた。年月の経過とともに、二人の関係はもうひとつしっくりといかなくなって、今では会う度につまらないことで口喧嘩をするようになっていた。トニー滝谷と一緒にいるときの方が楽しかった。でもだからといって、その恋人との関係をすぐに切ってしまうことはできなかった。彼女には彼女なりの思いがあった。そしてトニー滝谷と娘のあいだには十五も歳の差があった。彼女はまだ若く、人生の経験に乏しかった。その十五という年齢の差がこの先どういう意味を持つのか、測りかねた。少し考えさせてほしいと彼女は言った。

ショート・ヴァージョンが基本的な骨格を有しているのだが、ふたりがいかにウマが合うかを強調し、彼女が躊躇するのは年齢差と彼がいること、彼とは現在しっくりいっていないこと――反対にトニー滝谷といるときが楽しいひと時であること、が増補されていく。

トニー滝谷という方が楽しいくだりは、ショート・ヴァージョンが「彼女には高校時代からつきあっている（でも最近はどうもしっくりといかない）恋人がいた」と基本ラインの設定が説明されているが、その補足説明がロングでなされていく。この「しっくりいかない」ことについて増補されていくわけである。

c-1ロングの・ヴァージョン（全作品⑧）「正直に言って、彼と会うのはトニー滝谷と会うときのように手放しで楽しくはなかった」という彼女の見解を補強し、c-2・3ロング・ヴァージョン（単行本・文庫本）では「正直言って、彼と会うのは」をカットし、「トニー滝谷と一緒にいるときの方が楽しかった」とわかりやすい表現に改訂されている。

ここはロング・ヴァージョンC-1（全作品⑧）で増補した内容をほぼ使いつつ、わかりやすい表現に改訂している箇所である。

（b-1・2）ショート・ヴァージョン

彼女が考えているあいだ、トニー滝谷は①地獄のような日々を送った。②仕事は手につかなかった。③毎日ひとりで酒を飲んだ。孤独が突然重圧となって彼を押さえつけ、苦悶させた。孤独とは牢獄のようなものだと彼は思った。俺はこれまでそれに気づかなかっただけなのだ。もし彼女が結婚したくないと言ったら俺はこのまま死んでしまうかもしれないな。

（c-1）ロング・ヴァージョン（全作品⑧）

彼女が考えているあいだ、トニー滝谷は①地獄のような日々を送った。②仕事は手につかなかった。③毎日ひとりで酒を飲んだ。孤独が突然重圧となって彼を押さえつけ、苦悶させた。孤独とは牢獄のようなものだと彼は思った。俺はこれまでそれに気づかなかっただけなのだ。もし彼女が結婚したくないと言ったら、俺はこのまま死んでしまうかもしれないな。

（c-2・3）ロング・ヴァージョン（単行本・文庫本）

彼女が考えているあいだ、トニー滝谷は③毎日ひとりで酒を飲んだ。②仕事は手につかなかった。孤独が突然重圧となって彼を押さえつけ、苦悶させた。孤独とは牢獄のようなものだと彼は思った。俺はこれまでそれに気づかなかっただけなのだ。もし彼女が結婚したくないと言ったら、俺はこのまま死んでしまうかもしれないな。

ショート・ヴァージョンの「地獄のような日々を送った」は『全作品⑧』つまりロング・ヴァージョン（c-1）に受け継がれはしたが、『レキシントンの幽霊』ロング・ヴァージョン（c-2・3）では削除され、②③の順も入れ替えられている。ショート・ヴァージョンは「地獄のような日々を送った」ことを説明するために、それ以降の文章が書かれたが、ロング・ヴァージョン『レキシントンの幽霊』単行本（c-2）文庫本（c-3）は説明の部分がトニーにとって地獄のような苦しい日々であることを読み取ることができると判断して削除したのだろう。読み取れということである。その証拠に「地獄」以外、ショート・ヴァージョンの文言を同文で使っている。

この「苦悶の日々」を彼女に素直に話す、説明するのが、次のパラグラフである。

（b-1・2）ショート・ヴァージョン

彼は娘に会って、そのことを正直に話した。

（c-1・2・3）ロング・ヴァージョン（全作品⑧、単行本・文庫本）

彼は娘に会って、そのことをきちんと説明した。

「正直に話す」ことより「きちんと説明した」の方が理詰めな感じはする。精密なメカニカルデザインを描くトニー滝谷の几帳面な性格からすればロジカルな方が適切だろう。

（b-1・2）ショート・ヴァージョン

彼女と結婚したことによって、トニー滝谷の人生の孤独な時期は終了した。（中略）彼は孤独でなくなったことによって、もう一度孤独になったらどうしようという恐怖につきまとわれることになった。そのことを思うと、冷や汗が出るくらい怖かった。そういう恐怖は結婚して三ヵ月ばかり続いた。しかし新しい生活に馴染むにつれて、そして彼女が突然消えてしまうという可能性が減少するにつれて、それもだんだん薄らいでいった。彼はやっと一息ついて、おだやかに幸せの中に浸れるようになった。

（c-1・2・3）ロング・ヴァージョン（全作品⑧、単行本・文庫本）

トニー滝谷の人生の孤独な時期は終了した。（中略）彼は孤独でなくなったことによって、もう一度孤独になったらどうしようという恐怖につきまとわれることになったからだ。ときどきそのことを思うと、冷や汗が出るくらい怖かった。そういう恐怖は結婚して三ヵ月ばかり続いた。しかし新しい生活に馴染むにつれて、そして彼女が突然消えてしまうという可能性が減少するにつれて、それもだんだん薄らいでいった。彼はやっと落ち着いて、おだやかに幸せの中に浸れるようになった。

ショート・ヴァージョンの「彼女と結婚したことによって」はトニー滝谷の孤独を終了させる事由なのだが、それを削除し、トニー滝谷の孤独期間の終了が前面に押し出される。ロング・ヴァージョンの「ときどき」は必要なのかと思うが、これがないと彼女が突然消えてしまう恐怖が勝ちすぎて伏線が露顕しすぎてしまうことを嫌ったためと考えられようか。ショート・ヴァージョンの「やっと一息ついて」は問題の完全解決に至らぬ小休止感があるので「やっと落ち着いて」に改訂している。

このあとはロング・ヴァージョンでは二人で滝谷省三郎の演奏を聴きに銀座のクラブに出かける話が挿入されている。

ただし、ロング・ヴァージョンに本文異同がないかというと、ある。旧稿で既に指摘したところではあるが掲出しておく。

（c-1）ロング・ヴァージョン（全作品⑧）

もちろんそれはずっと昔の話だし、それに所詮子供の耳だった。でも彼にはその違いがとても重要なことであるように思えた。ほんの僅かな違いかもしれない。でもそれはとても大事なことなのだ。彼にはそれをはっきりと感じ取ることができた。彼はステージに上がっていって父親の腕を摑み、いったい何が違うんだい、お父さん、と問いかけてみたかった。でも彼はもちろんそんなことはしなかった。結局のところ彼にはそんな自分の思いについて何も説明できないのだ。彼は何も言わずに、水割りを飲みながら、父親のステージをずっと最後まで聴いた。

（c-2・3）ロング・ヴァージョン（単行本・文庫本）

もちろんそれはずっと昔の話だし、それに所詮子供の耳だった。でも彼にはその違いが重要なことであるように思えた。ほんの僅かな違いかもしれない。でもそれは大事なことなのだ。彼はステージに上がっていって父親の腕を摑み、いったい何が違うんだい、お父さん、と問いかけてみたかった。でももちろんそんなことはしなかった。彼は何も言わずに、水割りを飲みながら、父親のステージをずっと最後まで聴いた。

この後は結婚生活に入るのだが、紙数も尽きたこともあり、かつ長くもなるので次号としたい。

〈注〉

(1) 拙論『トニー滝谷』の本文改訂(一)―シャネル削除による人物造形―」「解釋學」六七輯（平二五・三）から始め、最新作は『トニー滝谷』の本文改訂(五)―ショート・ロング両ヴァージョンの上海関係についての措写―」「表現学」四号（平二〇・二）である。

(2) このあたりのことは拙論『トニー滝谷』の本文改訂(三)―全作品⑧本文の性格(続)・五二箇所七九個の本文異同一覧―」「表現学」三号（平一九・三）の末尾でも言及している。参照されたし。

(3) 「死は生の対極としてではなく、その一部として存在している」と「螢」でも『ノルウェイの森』でもわざわざゴチックで記すように「別の世界」と考えるのが村上の考える世界としては適切なのだが、それでは伝わらないと一般化を図ったために「遠い世界」に改変されたと考えられる。